

都城市文化財調査報告書第41集

都城市中央東部地区  
史跡・旧街路等調査報告書

1997年3月

宮崎県都城市教育委員会

口 紋



都城市中央東部地区航空写真（現況）

# 序

この報告書は、都城広域都市計画事業「中央東部土地区画整理事業」に伴つて都城市教育委員会が調査を実施した、都城市中央東部地区の史跡・旧街路等調査報告書であります。

中央東部土地区画整理事業が実施される市の中心部一帯は、江戸初期の開発によって町並や街路の整備が行われた地域であり、現在の市街地形成の過程を知る上でも大変重要な位置を占めています。今回の調査は、区画整理事業や各種開発によって失われるこうした旧街路や史跡を、映像や写真で記録して後世に伝えることを目的としておりますが、同時に進めている発掘調査の成果とも合わせ、当市の近世史を解明していく学術資料の一つとして活用していただくとともに、文化財への理解と認識を深める一助となれば幸いです。

最後に、調査にご協力いただいた市民の皆様や、ご指導・ご協力下さいました多くの先生方、および関係各機関に対しまして心より厚くお礼申し上げます。

1997年3月31日

都城市教育委員会

教育長 限 元 幸 美

## 例　　言

1. 本書は、都城広域都市計画事業「中央東部土地区画整理事業」に伴い、都城市教育委員会が調査を実施した、都城市中央東部地区史跡・旧街路等調査報告書である。
2. 調査期間は、平成8年11月1日から平成9年2月6日である。
3. 調査の組織は下記の通りである。

調査主体	都城市教育委員会		
調査責任者	都城市教育長	隈 元	幸 美
調査総括	都城市文化課長	遠 矢	昭 夫
調査事務局	同 文化課長補佐	永 野	元 保
	同 文化財係長	中 村	久 司
	同 主査	矢 部	喜多夫（庶務担当）
調査指導	都城市文化財専門委員	児 玉	三 郎
	同	重 永	卓 爾
調査員	同 主事	横 山	哲 英

4. 本書の口絵で使用した航空写真は、都城市都市開発課より提供を受けた。また、市街地周辺の航空写真は、国土地理院発行の都城地区空中写真を一部改変して用いた。
5. 各史跡・旧街路の写真撮影は川崎写真館に委託し、一部は横山が行った。
6. 本書に使用した調査地点位置図は、国土地理院発行の50,000分の1図をもとに作成し、分布図および撮影地点位置図は、2,500分の1国土基本図をもとに作成した。また、古地図の一部は、所蔵機関である都城市立図書館の許可を得て掲載した。
7. 本書の執筆は横山・重永・児玉が行い、文責は目次に記した。また、中央東部土地区画整理事業の概要については、都城市都市開発課に執筆を依頼した。  
なお、編集は横山が行った。
8. 本書に関する記録類（写真等）は、都城市立図書館内埋蔵文化財整理収蔵室で収蔵・管理している。
9. 現地での調査および報告書の作成にあたっては、都城市都市開発課・都城市市史編纂室・都城市立図書館等の協力を得た。

## 本文目次

I.はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 中央東部土地区画整理事業の概要	(都城市都市開発課) 2
3. 調査地点の地理的・歴史的環境	(横山) 3
4. 空中写真からみた中心市街地の変遷	(〃) 7
II.調査の記録	9
1. 調査の概要	(横山) 9
2. 現存する史跡・旧街路(小路・馬場)	(〃) 11
1) 志和池殿小路・牛田小路	11
2) 大昌庵馬場	17
3) 天神馬場・倉原天神・宮丸堀	19
4) 油屋小路	23
5) 東中町通・市営質庫跡	24
3. 文献史料からみた近世の史跡	(重永) 30
III.まとめ 「近世城下町としての本町・唐人町」	(〃) 32
(付論) 「江戸時代の新地移り以後の都市建設」	(児玉) 36

## 挿図目次

第1図 中央東部地区位置図	1
第2図 中央東部地区史跡・旧街路等分布図	4
第3図 「元和元年移転當時之都城之図」	5
第4図 「幕末都城之図」	5
第5図 「都城市全図」	6
第6図 史跡・旧街路等撮影地点位置図	10
第7図 伝白谷ト斎筆豊臣秀吉画像と白谷ト斎の花押写	30
第8図 本町・唐人町周辺古地図	31
第9図 嫂姐像ほかの写	32
第10図 九州の唐人町	33
第11図 都城中心市街地周辺史跡分布図	37

## 図版目次

巻頭図絵	都城市中央東部地区航空写真（現況）		
図版1	都城地区空中写真①【昭和22～23年】	都城地区空中写真②【昭和40年】	7
図版2	都城地区空中写真③【昭和50年】	都城地区空中写真④【昭和61年】	8
図版3	都城地区空中写真⑤【平成8年】		9
図版4	志和池殿小路現況写真1		11
図版5	志和池殿小路現況写真2・3		12
図版6	志和池殿小路現況写真4・5		13
図版7	志和池殿小路現況写真6・7		14
図版8	志和池殿小路現況写真8・9		15
図版9	志和池殿小路現況写真10	牟田小路現況写真	16
図版10	大昌庵馬場現況写真1		17
図版11	大昌庵馬場現況写真2・3		18
図版12	天神馬場現況写真1		19
図版13	天神馬場現況写真2・3		20
図版14	志和池殿小路・天神馬場を結ぶ道筋1・2		21
図版15	倉原天神跡を示す石碑	宮丸堀現況写真	22
図版16	油屋小路現況写真		23
図版17	柳河原橋現況写真		24
図版18	年見川現況写真1・2		25
図版19	東中町通現況写真1・2		26
図版20	東中町通現況写真3・4		27
図版21	東中町通現況写真5・6		28
図版22	東中町に残る近代の石造倉庫	市営貿易跡	29
図版23	天水家所蔵の姫姫像ほか		32

# I. はじめに

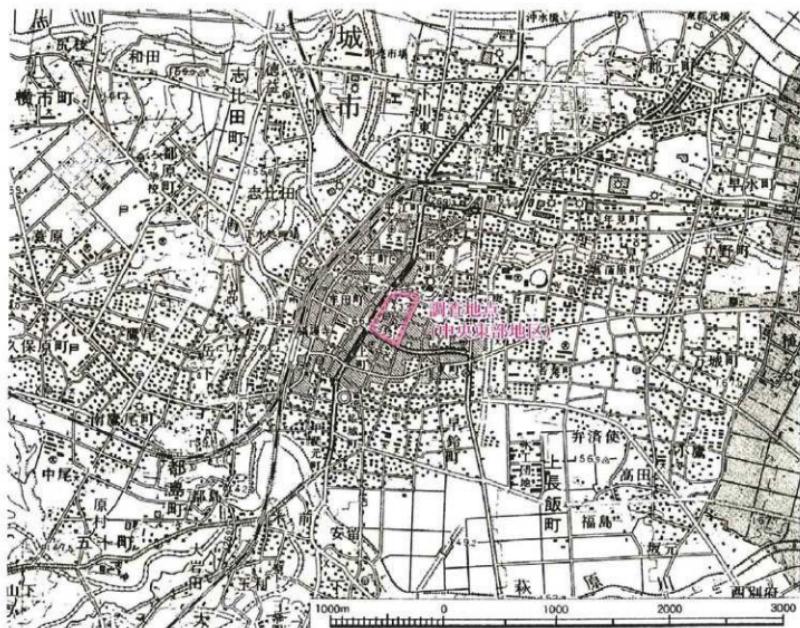
## 1. 調査に至る経緯

中央東部土地区画整理事業の実施区域である中心市街地北東部一帯は、元和元年（1615）の一国一城令以降に、都城島津氏の領主館を中心としながら武家屋敷や町屋の形成が進められた地域の一画に当たる。そのため、都城市文化課では、現在の市街地の基盤となつた近世以降の町割を確認する目的で、事業着手に先立ち、平成7年度より埋蔵文化財の発掘調査を実施している。

今回の調査は、区画整理事業が今年度より本格化することから、事前に開発区域内に残つてゐる旧街路・史跡等の把握と、写真・映像による記録保存を行い、遺跡発掘の成果ともども近世以降の町並み復元の資料として活用することを目的に実施された。

調査は、事業区域（中町・天神町・蔵原町の一部）内に所在する史跡・旧街路を中心に行つたが、旧街路についてはルート確認の関係上、上町や牟田町の一部も調査対象に含めた。

なお、映像記録を含めた調査期間は平成8年11月1日から平成9年2月6日である。



第1図 中央東部地区位置図

## 2. 中央東部土地区画整理事業の概要

今般の旧街区調査の発端となった中央東部土地区画整理事業は、市の中心市街地の一画を整備するため、平成2年に話が持ち上がってから、平成6年度の事業認可を経て、平成8年度より家屋等の移転及び工事がスタートしたところである。この事業は沈滞している中心商店街の活性化及び近接している住居地域の居住環境の向上を目的として地元住民の熱望により実現し、様々な経緯を経て進捗してきたものである。

土地区画整理事業は、ともすれば伝統的な街並みを破壊するものであるという一方的な誤解を受けてきた。しかし伝統的な街並みの中にもそこを拠点として生活する人々がおり、現在の環境は、必ずしも生活するのに充分な手だて、すなわち都市基盤の整備等がなされているとは言い難い状況下にあるため、インフラ整備の要望が高まり、土地区画整理事業の施行に至つたものである。

事業施行後の道路網については、現在の道路に準じて位置的にも機能的にも近いものは残すべく配慮した設計であり、この事業の施行により全てが変わってしまうのではなく、従来の街並みの雰囲気が残るのではないかと期待している。

事業の概要は以下のとおりである。

### 【中央東部地区概要】

1. 事業の名称 都城市広域都市計画事業中央東部土地区画整理事業
2. 施行者 都城市（土地区画整理法第3条第3項の規定による。）
3. 施行面積 12.9ha (129,077m<sup>2</sup>)
4. 施行期間 平成6年度～平成13年度
5. 公共用地の整備計画
  - (1) 都市計画道路
    - ① 中央東通線 W=20m L=280m
    - ② 東中町通線 W=16m L=405m
    - ③ 天神通線 W=15m L=465m
    - ④ 蔵原天神通線 W=6～10m L=458m (交差点取付工事等)
    - ⑤ 年見川通線 W=4m L=260m
  - (2) 区画道路 W=5～8m L=1556.5m
  - (3) 公園 (2ヶ所) A=3880.11m<sup>2</sup>
6. 事業費 8,272,000千円

### 3. 調査地点の地理的・歴史的環境

調査を実施した中央東部地区（天神町・中町・蔵原町の一部）は、大淀川の支流・年見川の南岸に位置し、近世においては唐人町の一部（東半部）がこれにあたる。地形的には、盆地東部から広がる一万城扇状地の端部に立地しており、西流する年見川沿い一帯は、とくに開析が進んだ低地面となっている。

現在の中心市街地の基盤となった近世の町屋形成は、元和元年（1615）の一団一城令後の都城島津氏による領主館の造営を契機とするものであった。その整備は、領主館（現在の市立明道小学校・都城市役所付近）と、当時の幹線道であった高岡筋往還（高岡街道）および志布志往還（志布志街道）周辺を中心に進められ、この幹線道を結ぶ小路・馬場によって区画された中に、武家屋敷や町屋が配されていた。

今回の調査地点である唐人町は、高岡筋往還（現在の鷹尾町～竹之下橋～西町～JR西都城駅～広口～上町～中町～前田町～平江町）ぞいに形成された町の一つである。近世においては、領主館の北口周辺（現在の広口付近）から順に広小路町・本町・唐人町の三町が配されており、求心的に整備された町屋の中では、北東線に位置している。このうち、区画整理事業が実施される唐人町の東半部は、南北に縱貫する高岡筋往還（現在の国道10号線）と、円通庵橋（現在の中町交差点）付近で高岡筋と分岐し、東西に延びている油屋小路（国道222号線、通称東銀座通り）、倉原天神前から年見川に向かう天神馬場に三方を囲まれた区域にあたる。北側の年見川周辺が近年まで水田として利用されていた低湿地帯であることから、町屋は志和池殿小路（志和池小路、通称志和池殿筋）以南に形成されていたと推測される。

なお、現在当該地区一帯には、志和池殿小路・大昌庵馬場（現在の大昌庵通）・油屋小路・宮丸堀（通称下ノ川）・天神馬場の一部と、倉原天神跡を示す近代の石碑が残るのみであるが、都城市内で近世以来の小路・馬場が現在でも当時のルートのまま利用されている例は稀有であり、当時の町並みを復元する上でも大変重要な地域であるといえよう。

#### <参考資料>

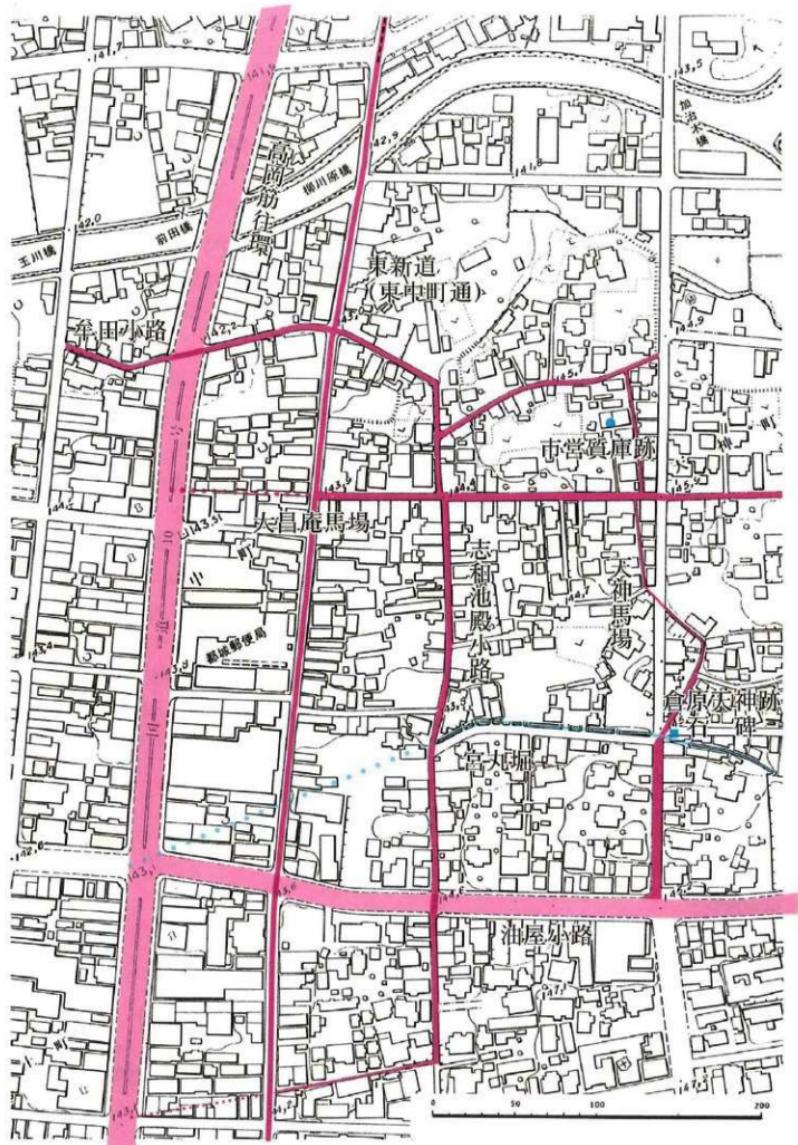
『都城市史』 都城市 1954

『稿本都城市史』 前田 厚 1989

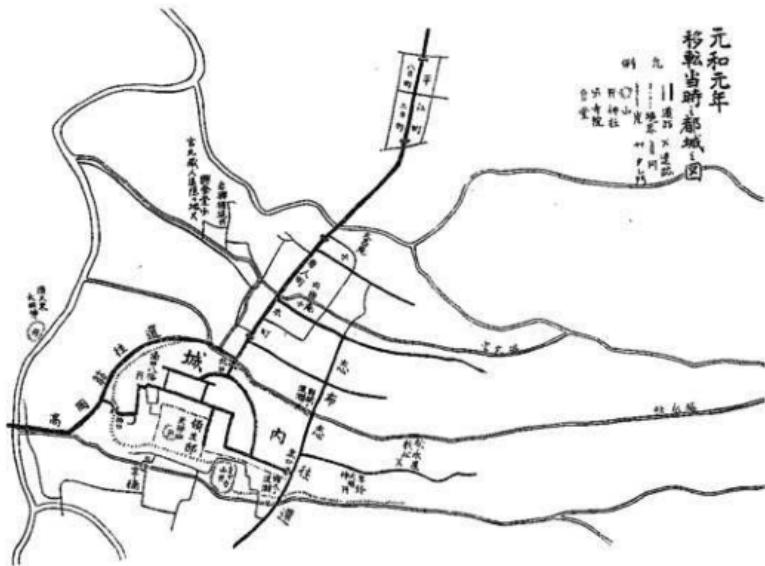
『北郷忠能の都城復帰と都城の町づくり』 佐々木綱洋 「零余子」

宮崎県立都城商業高等学校 1996

『都城市史別編 民俗・文化財』 都城市 1996



第2図 中央東部地区 史跡・旧街路等分布図（昭和47年測量の都城広域都市計画図をもとに作成）



第3図 「元和元年移転當時之都城之図」



第4図 「幕末都城之図」

とともに「都城市史」(1954)の付図による

# 都市示全圖

1. 市街地	2. 郊外地	3. 未開拓地	4. 未開拓地
5. 未開拓地	6. 未開拓地	7. 未開拓地	8. 未開拓地
9. 未開拓地	10. 未開拓地	11. 未開拓地	12. 未開拓地
13. 未開拓地	14. 未開拓地	15. 未開拓地	16. 未開拓地
17. 未開拓地	18. 未開拓地	19. 未開拓地	20. 未開拓地
21. 未開拓地	22. 未開拓地	23. 未開拓地	24. 未開拓地
25. 未開拓地	26. 未開拓地	27. 未開拓地	28. 未開拓地
29. 未開拓地	30. 未開拓地	31. 未開拓地	32. 未開拓地
33. 未開拓地	34. 未開拓地	35. 未開拓地	36. 未開拓地
37. 未開拓地	38. 未開拓地	39. 未開拓地	40. 未開拓地
41. 未開拓地	42. 未開拓地	43. 未開拓地	44. 未開拓地
45. 未開拓地	46. 未開拓地	47. 未開拓地	48. 未開拓地
49. 未開拓地	50. 未開拓地	51. 未開拓地	52. 未開拓地
53. 未開拓地	54. 未開拓地	55. 未開拓地	56. 未開拓地
57. 未開拓地	58. 未開拓地	59. 未開拓地	60. 未開拓地
61. 未開拓地	62. 未開拓地	63. 未開拓地	64. 未開拓地
65. 未開拓地	66. 未開拓地	67. 未開拓地	68. 未開拓地
69. 未開拓地	70. 未開拓地	71. 未開拓地	72. 未開拓地
73. 未開拓地	74. 未開拓地	75. 未開拓地	76. 未開拓地
77. 未開拓地	78. 未開拓地	79. 未開拓地	80. 未開拓地
81. 未開拓地	82. 未開拓地	83. 未開拓地	84. 未開拓地
85. 未開拓地	86. 未開拓地	87. 未開拓地	88. 未開拓地
89. 未開拓地	90. 未開拓地	91. 未開拓地	92. 未開拓地
93. 未開拓地	94. 未開拓地	95. 未開拓地	96. 未開拓地
97. 未開拓地	98. 未開拓地	99. 未開拓地	100. 未開拓地



第5図 「都市示全圖」〔福本都城市史〕 1969 の付図による

#### 4. 空中写真からみた中心市街地の変遷

図版1



都城地区空中写真① [昭和22～23年] (米軍撮影 M25-A-22 N O.19の一部を拡大して使用)



都城地区空中写真② [昭和40年] (国土地理院 C 5 N O.19の一部を拡大して使用)

図版2



都城地区空中写真③〔昭和50年〕(国土地理院 C 22 N O. 8 の一部を拡大して使用)



都城地区空中写真④〔昭和61年〕(国土地理院 C 5 N O. 6 の一部を拡大して使用)

図版3



都城地区空中写真⑤【平成8年】(国土地理院 C4 N O.6647の一部を拡大して使用)

## II. 調査の記録

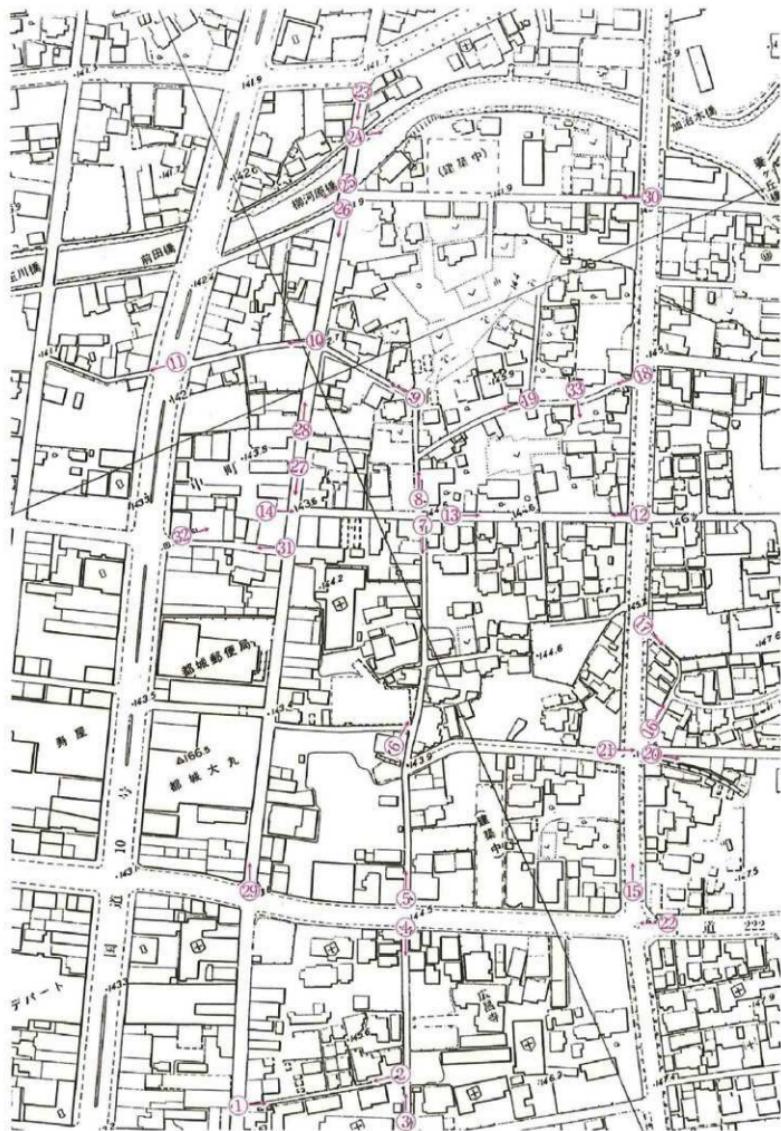
### 1. 調査の概要

調査は、まず古地図等に記されている近世の史跡・旧街路（小路・馬場）の現況把握を目的とする現地踏査から着手した。その結果、近世の街路については、近・現代の都市整備により本来の道幅や景観などはほとんど遺存していないかったものの、いわゆる「新地移り」に伴って領主館を中心とする城下町的な町屋形成が進められた際、ともに整備された当時の小路・馬場等の基本ルートが、さほど変化しないまま現在でも利用されている状況が確認された。（第2～4図参照）文献史料や古地図に登場する史跡については、昭和初期に設置された史跡を示す石碑を含め、中央東部地区内でその位置を特定できるものは皆無であり、唯一宮丸堀の一部と、倉原天神跡を示す石碑を確認するにとどまった。

また、調査過程において、近代（明治初期）に入ってから新設された街路である東中町通と、昭和初期の社会福祉事業施設であった市営質庫跡も確認されたことから、近世の史跡とともに分布図に付記した。

こうした現地調査の成果および地図上での確認作業を経た後、各街路・史跡ごとの記録写真的撮影と、現況の街並を含めた記録映像の作成を平行して実施した。

各街路・史跡等の概要については、以下の通りである。



第6図 史跡・旧街区等撮影地点位置図（平成5年修正の国土基本図をもとに作成）

## 2. 現存する史跡・旧街路（小路・馬場）

### 1) 志和池殿小路・牟田小路

志和池殿小路（志和池小路）は、高岡筋往還の東側をコの字形に巡る小路である。道筋上に所在していた志和池殿屋敷からこの名称があると伝えられている。当時のルートは、本町沿いの高岡筋往還から東に入り、突き当たった志和池殿屋敷から北に折れ、油屋小路・大昌庵馬場を横断した後、再び西進して高岡筋往還を挟んだ牟田小路とつながっていた。

現在は一部が消失しているものの基本ルートは近世当時のままであり、欠損部を含む総延長は約780mと推定される。また、志和池殿屋敷跡と現在の東上町通との間（約100m）は、道幅約2.5mと極端に狭く、整備当時の幅員がそのまま遺存していると推測される。

牟田小路も、志和池殿小路同様にコの字形に巡る小路であり、両小路は高岡筋往還の東西で対をなし、唐人町を取り囲むように巡っていたと思われる。牟田小路も一部はすでに消失しているものの、基本ルートはかなり残存しており、今回調査を実施した高岡筋往還東側（中央東部地区）との関係を明らかにする上でも、詳細な調査の実施が必要である。

図版4



志和池殿小路現況写真1 (P①：東上町通—志和池殿屋敷跡)

図版 5



志和池殿小路現況写真2 (P②：志和池殿屋敷跡→東上町通)



志和池殿小路現況写真3 (P③：志和池殿屋敷跡→油屋小路)



志和池殿小路現況写真4 (P④：油屋小路→志和池殿屋敷跡)



志和池殿小路現況写真5 (P⑤：油屋小路→宮丸堀)

図版7



志和池殿小路現況写真6 (P⑥：宮丸堀付近→大昌庵馬場)



志和池殿小路現況写真7 (P⑦：大昌庵馬場→宮丸堀方向)

図版8



志和池殿小路現況写真8 (P⑧: 大昌庵馬場→志和池殿小路の屈曲部)



志和池殿小路現況写真9 (P⑨: 志和池殿小路の屈曲部→東中町通)

図版9



志和池殿小路現況写真10 (P⑩：東中町通→国道10号線)



牟田小路現況写真11 (P⑪：国道10号線→牟田小路入口)

## 2) 大昌庵馬場

現在の大昌庵通。道筋にあつた寺社からこの名がある。

当時のルートは、高岡筋往還に面した唐人町の中ほどから東に入り、志和池殿小路・天神馬場を経て、現在の天神町方面へと抜けていた。倉之馬場・油屋小路とともに、高岡筋往還の東側にはほぼ等間隔で配されていることから、町割の基盤となる幹線道であつたと推測される。なお、現在は東中町通と国道10号線の間が欠損しており、道幅も狭・現代の道路改良によって改変されている可能性が高い。

また、名称の由来となつた大昌庵については、新地移りの際に都之城周辺から移設・再建されたと伝えられるが、その正確な所在地等は不明である。

図版10



大昌庵馬場現況写真1 (P12: 天神通→東中町通)

図版11



大昌庵馬場現況写真2 (P13 : 志和池殿小路との交差部付近→天神通)



大昌庵馬場現況写真3 (P14 : 東中町通→天神通)

### 3) 天神馬場・倉原天神・宮丸堀

天神馬場は、油屋小路から宮丸堀を渡り、大昌庵馬場の北側に至る道筋を指す。同馬場と宮丸堀が交差するあたりにあった社（倉原天神）からこの名称があると伝えられている。

現在は、油屋小路と大昌庵馬場の間、宮丸堀のすぐ北岸にクランク状の道筋が残るのみであるが、昭和50年代末に現天神通線が拡張されるまでは、道幅約2~2.5mの馬場跡が約250mほど残存していたようである。また、発掘調査の結果、この道筋のすぐ西側を並走している中世（15世紀中頃）の道路状遺構が確認されていることから、近世（17世紀初頭）の新地移り以前に同様のルートが存在していた可能性も考えられる。

倉原天神の由緒は定かではないが、すぐ西側を通る馬場の名称由来となった天神社は所在していたようである。現在は、昭和初期に建立された石碑が宮丸堀北岸際に残るのみであるが、その名称は、藏原・天神の両町名として今に伝わっている。

宮丸堀は、宮丸蔵人の開削と伝えられるが、正確な年代等は不明である。西流する柳川原川から現在の東小学校付近で取水し（麦田堀）、天神町・中町・上町・牟田町を経て、宮丸町付近で大淀川に注いでおり、周辺の脇田の用水として利用されていたと思われる。現在暗渠化が進んでおり、中央東部地区周辺では、唯一倉原天神跡の東側でその形状を確認することができる。

図版12



天神馬場現況写真1 (P15 : 油屋小路との交差部付近→年見川方向)

図版13



天神馬場現況写真2 (P16: 南西からみたクランク状に残る馬場跡)



天神馬場現況写真3 (P17: 北西からみたクランク状に残る馬場跡)



志和池殿小路・天神馬場を結ぶ道筋1 (P18 : 天神通→志和池殿小路方向)



志和池殿小路・天神馬場を結ぶ道筋2 (P19 : 志和池殿小路との合流部をのぞむ)

図版15



倉原天神跡を示す石碑 (P20)



宮丸堀現況写真 (P21) : 天神通→天神町方向)

#### 4) 油屋小路

現在の国道 222号線（通称東銀座通り）。道筋に油燈所があつたことから、油屋小路の名称で呼ばれている。

本町・唐人町の境から宮丸堀と平行に東進する道筋で、志和池殿小路を横断し、北側の大昌庵馬場と結ぶ天神馬場、南側に延びる上之馬場・志布志往還と交差している。倉之馬場・上之馬場ともども本町東側を区画する役割も果たしていたと思われ、現在の国道 222号線同様、主要幹線道として位置付けられる。

なお、同小路の北側には、短期間ながら領主直営の油燈所（油製造所）と焼物所（陶窯）が置かれていたと伝えられている。

図版16



油屋小路現況写真（P②：天神馬場・志布志往環・油屋小路の交差部→円通庵方向）

## 5) 東中町通・市営質庫跡

近世の小路・馬場跡を除く中央東部地区内の街路のうち、最も早く整備されたのが現在の東中町通である。明治5年に領主館東側の御門馬場とタレノ下横丁との間を結ぶ直線道路として新設され、東上町通とあわせて東新道と呼ばれていた。

市営質庫は、社会福祉事業の一環として、昭和5年に大昌庵馬場の北側に施設が設置された。当時は事務所と石造・鉄筋コンクリート造の倉庫各1棟ずつが立ち並んでいたが、福祉事業の拡大と利用者の減少により昭和44年に廃止され、現在は鉄筋コンクリート造の倉庫1棟のみ残っている。

図版17



柳河原橋現況写真 (P23: 前田町側→上町方向)



年見川現況写真1 (P24 : 柳河原橋→加治木橋〔上流部〕方向)



年見川現況写真2 (P25 : 柳河原橋→前田橋〔下流部〕方向)

図版19



東中町通現況写真1 (P⑯：柳河原橋付近→志和池殿小路との交差部方向方向)



東中町通現況写真2 (P⑰：大昌庵馬場との交差部付近)



東中町通現況写真3 (P② : 柳河原橋方向をのぞむ)



東中町通現況写真4 (P③ : 円通庵付近→柳河原橋方向)

図版21



東中町通現況写真5 (P③) : 天神通→東中町通方向)



東中町通現況写真6 (P③) : 東中町通→国道10号線方向)

図版22



東中町に残る近代の石造倉庫 (P32)



市営質庫跡 (鉄筋コンクリート造の倉庫跡) (P33)

### 3. 文献史料からみた近世の史跡

円通庵：近世後期には西明寺の末となっており、お堂は石据の2間4面、三方縁の規模で、瓦葺であった。この寺庵は、もとは都之城の中尾口にあったが、忠能の新地移り以後にここへ遷ったと伝えられる。そしてこの観音堂は、都城三十三所観音巡礼の九番札所となっていた。

御詠歌は、「城の榮へを守る本町や 君が代仰ぐ観音ぞこれ」



倉原天神の跡にはかつて有名な白谷ト齋の石塔があつた。それには、

「梅園宗意居上白谷大炊左衛門利光、号ト齋

明暦四年三月四日」

と刻銘されていた。彼は都城譜代の武士で、また絵師としても知られ、豊臣秀吉画像に因わるエピソードがある。

第7図 伝白谷ト齋筆豊臣秀吉画像と  
白谷ト齋の花押写

若松与兵衛終焉の地：彼は北郷忠能の家臣であったが、禁制の一・向宗に帰依していたことが露頭し、成原四方辻において切腹して果て、家は絶した。

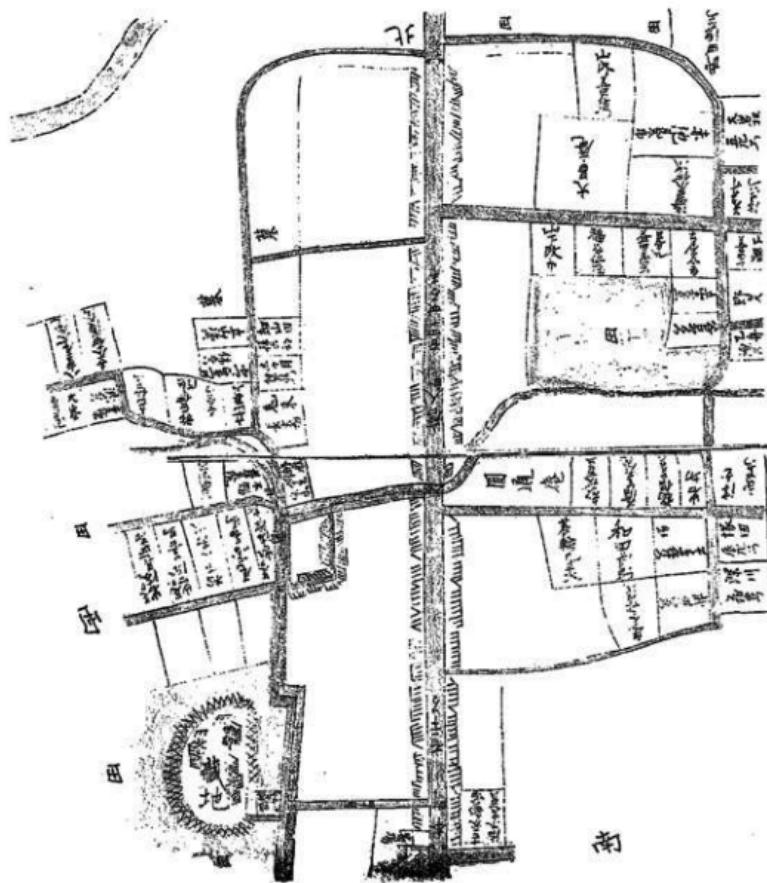
その供養塔には「源善宗心居士、若松与兵衛、十一月廿一日」の銘があり、後世、彼のためにその傍らに石灯籠も建立され「奉寄進 宝曆十二年甲午四月廿一日」とあり、これは連名七人のものであった。

また、忠能女を母にもつ「清淨院殿涼屋貞夏大姉」(後に島津久定・忠長室)は、若松与兵衛の死をいたみ、その位牌を十念寺(五拾町村)に安置した。

#### <参考資料>

『都城島津家史料』第1・3巻 1988・1989 重永卓爾編

『莊内地理志』卷之十四、十五、六十



第8図 本町・唐人町周辺古地図

### III. まとめ

#### 近世城下町としての本町・唐人町

都城島津氏は時久の16世紀後期までは、島津本宗家一族の中で最大の城・領を有していたが、豊臣氏への敗戦後は、僅かに祁答院（宮之城町）が与えられた。その間、都城は伊集院氏領となるが<sup>1</sup>、莊内合戦を経て16世紀末には旧領が北郷忠能にほぼ安堵された。そして17世紀の初め、旧来の本城であった都之城（鶴丸城）を去って、軍神山（旭丘神社）を中心におよそ東西360m、南北270mの規模で領主の城館を建置した。17世紀の中葉すぎ、島津本宗家より北郷家を嗣いだ島津久定は、従来の城館を東方に移動するなど大造成を施した。

このように近世の城館の整備は忠能のⅠ期にその基礎が形成され、久定がⅡ期でそれを拡張整備させたといえよう。Ⅰ期の時より周囲の微高地には重臣層を配し、Ⅱ期に入つても城内は多くの門と馬場が展開し、城外にも複数の馬場・小路を割っている。そして城館の北部のいわゆる高岡街道に面して、南より本町、北へ唐人町がおかれた。また、その外縁や裏通りには職人もおかれたようである。唐人町の北端には「東西之間」、また「大堀調」えたとある。

なぜ既述のことく城下町と規定したかといえば、都城島津氏は島津本宗家の中で最大の私領を有するからであり、出入はあるものの、大凡35,000石の大身であつたこと。また、その館の形態よりみても、少なくとも初期の段階は、行政の中心の館の周辺をあたかも城の網張りと同様に作事し、その構造ともいべき外郭も大堀と土塁を敷設するなど、軍事的側面を持つていること。また、城下の人口に武士が多く、領域経済の中心であつたことなど南九州型ともいるべき形態が指摘できるのである。その他、支配機構の面よりも町奉行の配下に武士の部当、町人の部当が存在するなどそのことを裏付けるものといえる。

本町：戦国期は鶴丸城の南側（当時は「中尾口」：大手）におかれ、都城で最古の町で、上記の新城下町造りの際に既述の場所に移った。別当以下みな苗字をもち、主君と行を共にしている譜代的町人グループであり、また御用商人も存在している。

唐人町：その成立は最終的には明末、清初の中国大陆の動乱を機とする。渡来後はやはり領主との関係は本町などと同様であったようであるが、多様な職能が歓迎されたものと思われる。ここのはじ人は唐通詞諸家の系譜を

図版23  
天水家所蔵の  
媽姐像ほか



第9図 媽姐像ほかの写  
(『莊内地理志』巻之十四より)

有し、また有名な幕府の儒官高玄岱の祖である医師高寿覺は都城の出身であり、特に地元では何欽吉の事蹟が名高い。このように唐人による医学など多才な文化面の影響は広く深いものがある。ところが、寛永12年（1635）の第3次領国令は上記の人々で長崎に移住した人もいるが、他は地域社会に同化していった。その背景には法的にも差別など存在しなかつたからである。

既述の両町は18世紀末のデータに依れば本町は男女513人、唐人町男女280人と見えていて、南九州では商工業人口は多いほうであろう。なお、この他に館の西方に三重町・後町など水運利用の町場も存在した。

ともあれ近世の商工業地域は、中世の水堀があり、空間には田圃が展開し、町寺詣りや神社の祭礼、また異国情緒豊かな姫島の祀など当時はいん賑を極めたことであろう。ここ円通庵の觀音巡礼歌の「城の榮へを守る本町や 君が代御ぐ觀音ぞこれ」は、この町の本質をいいえて妙である。かくして世はうつろい最大のスポンサーは去り、近代を迎えた。

過去の時空の原風景に想いをいたし、また自然との共存の中に真の生業があった、見ぬ世の人々をしのぶ心が、将々として市民の集う知的でロマンの源うこの町づくりの原点といえよう。



第10図 九州の唐人町（「週刊朝日百科日本の歴史31」を改変）

## 付 論

## 江戸時代の新地移り以後の都市建設

都城市文化財専門委員 児玉 三郎

都之城が元和元年（1615）の一国一城令で廢城になると、240年間にわたる北郷氏在城は終り、城主は大淀川を越え、現在の市役所と明道小学校の敷地に城主館を構え、館を取り巻くように武士屋敷を置いた。（これを「新地移り」という）。この区域（現在の八幡・姫町）は御城内と称され、城内の出入口を北口・東口・西口の三ヶ所とし、番所を置いて人の出入を制限した。その他、御城内の東（早鉢町・藏原町・天神町）と西（甲斐元町・松元町）も武士居住区とした。

町人の住む町は、北口から北へ本町（長さ120間）、唐人町（長さ144間半）と順に一列に並び、両町の南と北の入口には垂門が建っていた。この門は夕方になると門は閉じ、朝になつて開けられるまで夜間の通行は禁止されていた。

本町の歴史は応仁2年（1468）、安永城（庄内町）築城のとき城下町として生まれ、更に都之城下町として移り、そして元和元年（1615）の新地移りで現在地に至った。当時の本町は、藏之馬場入口北角の垂門から現在の上町（明治5年本町は上町、唐人町は中町と改称）と中町の境まで、境には円頭庵（円通庵）という尼寺があり、宮丸堀に架かる円頭庵橋もあつた。

唐人町は円頭庵橋北際から前田橋の手前約70メートルの所までで、東側の志和池どんの小路と西側の牟田小路がつながる所にも垂門が建っていた。この町は、天正17年（1589）と江戸初期頃（元和・寛永初め）に、都城領の飛地であった鹿児島県の内之浦港に渡來した明国人一行を住まわせた町である。当時は先進国人としてそれぞれの分野で中國文化を伝えたことから、領主は特に厚遇した。なかでも何欽吉は医術を通じて貢献し、その墓は県指定史跡になつてている。

この両町は薩摩藩三大街道の一つで東目筋又は高岡街道と呼ばれる街道の町であった。現在も国道10号線であり、中央通りと呼ばれ市の中心街である。

本町垂門から広口交差点の間は広口馬場といい、ここだけが道幅が広くなつていて。ここは宿場で人々の出入が多く、高札が建ち、東側には馬つなぎ所、町会所、横目座、客屋等があつた。この南角には、甲島も飛来したという阿弥陀池（池の中にあつたアミダ堂が名称の由来）があり、町区と城内の防火用水をも兼ねていたと思われる。

西口から西へ延びる町は西新町といったが、後町と三重町とから成つていて。後町は本町と同様の歴史があり、三重町は天正15年（1587）豊臣秀吉軍に敗れた薩摩軍が、豊後國から退却して帰国するとき、難船に巻き込まれて豊後國三重郷から移住した人々の町といわれる。この町にも東端と西端に垂門があつた。

この町に統いて、竹之下川（大淀川）に架かる竹之下大橋がある。高岡街道の重要な橋で、都城では前田橋と共に藩費でもって立替工事が行われていた。三重町と後町境の溝橋（用水路）は、安永9年（1780）北口入口の橋と共に都城では初めて石橋に替えられた。西町の石橋

は近年まで残っていた。

鷹尾の台地から下りてきた高岡街道は、竹之下橋から西町の東端（現在のJR高架付近）に至り、東垂門から左（北）へ直角に曲ると、松元馬場から西都城駅手前へ出て、右（東）へ進み広口交差点で左折して、中央通りへ出していた。

以上、現在の南都市街地の概要について述べたが、新地移りの都市建設は中世以来の開田地帯で行われていることは地理志でわかる処であるが、鬼束文書の応永32年馬上取帳により、姫城川沿いの台地に点在した領主達によって予想以上に開発されていたことを知ることが出来る。しかし、南部市街地の北端を流れる年見川南岸台地では、僅かに宮丸氏のみが知られているだけである。また、年見川を挟んだ中町の対岸である前田、大王の領主らしき前田門大藏之丞が寛正4年（1463）に治水の神、大王社を置いたことや、下流の宮丸町志比田町一帯の領主らしき平田太郎九郎七郎や徳益名等の寛正4年寄進佛像、天正18年（1590）北郷時久再興稟札記録（地理志）等などから彼等が河川の氾濫にいかに腐心していたかがわかる。



第11図 郡城中心市街地周辺史跡分布図

- 1.秋本氏屋敷跡 2.大南氏屋敷跡 3.上下郡氏屋敷跡 4.前田氏屋敷跡 5.吾人宿跡 6.宮丸氏邸跡 7.唐人町跡 8.本町跡 9.船小屋跡
- 10.早納大明神跡 11.大王妙見社跡 12.岩井御界大塚跡 13.郡城領主館跡 14.都城半藏屋敷跡 15.浜能丸 16.三重町・後町跡 17.油池所跡
- 18.荒物所跡 19.底川跡 20.大丹堀跡 21.食原天神跡 22.一向宗若松と兵馬墓跡 23.西口番所跡 24.北口番所跡 25.東口番所跡
- 26.志和治どん小堀 27.牛田小路 28.円原堀跡

# 都城市中央東部地区 史跡・旧街路等調査報告書

都城市文化財調査報告書第41集

1997年3月

編集発行 宮崎県都城市教育委員会  
〒885 宮崎県都城市姫城町6街区21号  
TEL (0986) 23-9547 FAX (0986) 24-1989

印刷 (有)都城新生社印刷  
〒885 宮崎県都城市都北町7283  
TEL (0986) 38-3500 FAX (0986) 38-4187